

このコーナーでは、この地域に伝わる民話を紹介し、皆さんからの感想画を募集しています。紹介する民話は、子どもたちにも、ふるさとの伝説や昔話を教え、少しでも遠い祖先の心や、郷里の土地のぬくもりを感じてほしいと、松浦市教育委員会が平成4年に再編した「松浦の民話」という本から引用した話です。

むかしむかし、太郎べえさんというおじいさんが住んでいました。

ある日、太郎べえさんが、にただの浜（今の西山入口の近く）を通りかかると、一羽のつるが飛び上がろうともがいていました。羽を痛めて苦しそうにしています。

松浦の民話⑦

つるのおみやげ

と言って、つるを放してやりました。

その夜、太郎べえさんは夢を見ました。昼間、放してやったつるが、枕元に舞い降りて、

「おじいさん、本当にありがとうございました。助けていただいたお礼に、ここにうんこをして行きます。このうんこを顔に塗ってください。」

「かわいそうに。」

太郎べえさんはつるを抱きかかえて家に帰り、手厚く介抱してやりました。

四、五日すると、つるはすっかり元気になりました。「さあ、早くみんなの所へお帰り。」

と言うと、つるの姿は消えてしまいました。

太郎べえさんが、寝ぼけまなこをこすりこすり、きよろきよろ、枕元を見回すと、ありました、ありました。

床の間に、小さなお山のようになり上がった、つるのうんこがありました。「ばつて、これは顔に塗るとは、きさなかなあ。」

と、手を伸ばしたり引つめたりしていましたが、思い切つて、少しばかり手のひらに取ると、顔に塗りました。すると、どうでしょう。

しわがみるみる伸びて、つるつるになっていきます。大急ぎで鏡を取り出して、のぞいてみてびっくりしました。鏡の中には、二十歳ぐらいの若い太郎べえさんの顔が見えました。

夢ではないかと、頬を思いつきりつねってみました。「痛か。」

やつぱり夢ではありません。「ばあさん、ばあさん、早く起きてみな。」

と、隣に寝ているおばあさんを揺り起こしました。

起こされたばあさんが、「おじいさん、こんな夜中に何ごとじゃすな。」

と、眠そうな目でひよいと前を見ますと、若い人が立っています。おばあさんはびっくりして、

「助けてえ、どろぼう、どろぼう。」
と、腰を抜かしそうになりました。



「ばあさん、わしじや、わしじや。」

若い人がそう言うので、おばあさんが気を静めてじつと見ると、確かに三、四十年前ごろのおじいさんそっくりです。「ほんなこと、おじいさんじゃすな。こりやいったいどうした訳じゃすな。」

あつげにとられているおばあさんに、おじいさんは今までの話をしました。

「このうんこば塗ると、わこうなるとじゃすな。そんじやわたしも。」

おばあさんもみるみるしわが伸びて、若返りました。そして、二人は手を取り合つて喜びました。

■あなたの力作を募集!

— 民話の感想画募集 —

この民話を読んで感じた情景をイラストにして、必要事項を記入の上、左記まで持参、郵送またはメールにて送付してください。応募いただいたイラストは審査をし、上位のものを次の市報で紹介しします。

【応募資格】住所、年齢、性別など何も問いません。どなたでも応募できます。

【イラストの規格】はがきまたはA4サイズ以内の白紙に絵の具やクレパスなどで書いたカラーのもの（色鉛筆の場合は濃く塗ってください）。

【必要事項】住所、氏名（ふりがな）、電話番号、年齢、職業（学校名）

※掲載する場合、ペンネームを希望する人は、ペンネームもご記入ください。

※はがきで応募される人は、必要事項を表の下部に記載してください。なお、いただいた個人情報（民話コーナー以外には使用しません）

【応募締切】10月12日（火）必着
【応募・問合せ先】
〒0059-4509

松浦市志佐町里免365番地
松浦市まちづくり推進課
秘書広報係
☎0956-72-1111

✉0956-72-1111
Eメール＝
hsyo@city.matsura.g.jp

※福島支所、鷹島支所、そのほかの各支所でも受け付けています。

「こぎゃんうれしかこたなか。うんこもまだ、ちよつと残つとるせん、お隣の次郎べえさんにも、分けてやりまっしよ。」

と言つて、隣へ持つて行きました。

太郎べえさんが隣の戸を叩くと、出てきた次郎べえさんは、若い男女がいるので、首をかしげながら、

「どなたじゃすきや。」

と、聞きました。

太郎べえさんは、今までのことを残らず話し、持つて来たうんこを差し出しました。

「つるのうんこや、きさなかなあ。」

と言いながら、次郎べえさんも、次郎べえさんのおばあさんも、顔に塗りました。「こりや、ありがたか。わしや、金も田畑もたいそう持つとるばつて、若さだけ持たんじゃつた。これで何もかもそろたばい。あんたのおかげたい。お礼にわしの財産ば半分やるばい。」

と、若くなつた次郎べえさんは、躍り上がつて喜びました。

その年の暮れ、

「つるのおかげで、今年は本当に良か年じゃつた。来年も良か年になることつるしばば飾り、つるの恩を忘れんことしまっしよ。」

と、太郎べえさんが言うと、

二人で若さばもろつたから、もろもき（うらじろ）も飾ろうたい。」

と、次郎べえさんも言いました。

おばあさんたちは、

「こぎゃん、うれしいことはなかつたせん、しいの木も飾つて正月ば迎えまっしよ。」

と、言いました。

みんな賛成して、両家では、「つるしば」「もろもき」「しいの木」を飾りました。

そのことが田代地区にも広がりが、正月には、今年も縁起の良い年になるようにと、この三つを必ず飾るようになったということです。

（御厨町田代）

松浦の民話イラスト

読者の皆さんから寄せられたイラストの審査結果を以下の通りお知らせします。

先月の民話「七頭半のしか」のイラストに、2通の応募がありました。ご応募ありがとうございました。



【最優秀賞】

庄司優香さん（志佐・辻ノ尾、7）

「鹿の角、鼻、目などとても丁寧に描かれていますね。逃げるできないほど一度に矢が飛んできています。鹿の悲しそうな目が印象的な作品です」（はま）



【優秀賞】

庄司伊吹君（志佐・辻ノ尾、5）

「飛んできた矢に驚いている鹿の表情がよく描かれていますね」（はま）